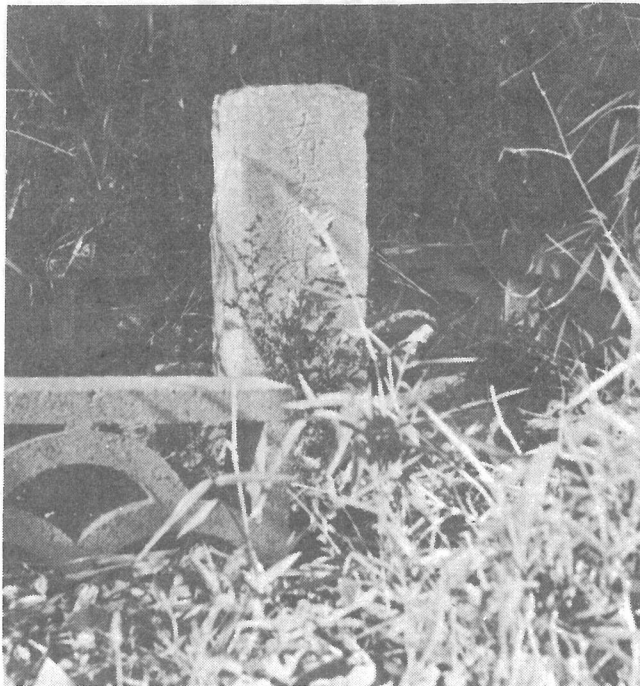


横芝の碑 (その十六)

大貫大尉追悼の碑



上塚保育所の前を新島方面に向
って往きますと、やがてこの道は
丁字路になり、右に曲ると、すぐ
旧上塚農協で、左に曲ると蓮沼村
に通じています。この手前右側の
道端に高さ五十程の道標の様な
石柱が建っています。雑草に囲ま
れていますので、よく注意しない
と見落してしまいそうな簡粗な石
ですが、これは太平洋戦争中、本

土攻防の空中戦で、練習機の一隊
を率いて敵の艦載機と交戦し、全
機玉砕した大貫隊長の戦没追悼碑
なのです。

太平洋戦争も「本土決戦」と豪
語する軍首脳部の掛声も空しく、
敗戦の色も次第に濃くなってきた
昭和二十年二月十六日、九十九里
海岸から来襲した敵の艦載機約百
機は、干潟の飛行場に攻撃を加え

て鹿島灘方面に脱去して行きまし
たが、その中の十数機は分散して
横芝飛行場にも攻撃しかけて来た
のです。

横芝飛行場は、栗山と北清水の
地域に跨っていました。栗山に
は落下傘部隊の基地もありました
ので、これを援護する戦斗機隊と
海軍の練習機隊等が駐屯していま
した。

すでに幾度かB29等の空襲で苦
い経験を持っていましたので、虎
の子の様に残り少ない戦斗機は、飛
行場から遙かに離れた林の中等に
待避させて、飛行場の哨戒は赤ト
ンボと呼ばれた布張りの練習機が
その任務に就いていたということ
です。

その日も何機かの練習機は気休
めのような迷彩を施した翼を広げ
て哨戒に当たっていました。艦載
機の来襲という予想もしなかった
事態に遭遇した飛行場では、余り

にも突然のことで、林の中の戦斗
機を引き出す暇もなく、丸裸に等
しい練習機がこの敵機を迎え撃つ
たのです。武器としては飛行士が
腰に提げた拳銃が一丁だけ、止む
なく敵機の後尾に廻って敵の飛行
士を脅かして操縦を狂わせるか、
体当たり以外の方法はなく、しかも
敵の機銃弾を潜り、また上昇が後
手にまわった等の悪条件の中のこ
とですから、この戦斗の惨情は言
語に絶するものがあり、次々と敵
機の餌食となってしまったのです。

その中の隊長機と思われる一機は
最後まで敵機に喰いついて執拗な
抵抗を続けていましたが、遂に燃
料タンクを撃ち抜かれて火達磨に
なって落下する愛機から、辛うじ
て落下傘で脱出した飛行士は、脱
出の際既に長靴の中にガソリンが
流れ込んだらしく、足元の辺りか
ら火を吹き始め、これが軍衣か
ら落下傘にまで炎え移り、飛行士

は飛礫の様な速度で新島の三島附
近に落下して来たのです。
手に汗を握って、この悲壮な戦
斗を凝視していた人々が飛行士を
援けようとして馳け寄った時、飛
行服は殆んど焼け焦げて、残って
いる部分には無数の弾痕が貫いて
いるという壮烈なものでしたが、
馳け寄った人々に「日本航空隊オ
オヌキ」と言い残して冥目した
ということでした。

この遺体は、一度軍隊が収容し
て遺族の方に引き渡されたのです
が、其後遺族の方がこの地を訪れ
て、「追悼の石を建立したい」と
いう話を聞いた地主の伊藤秀哉さ
んは、進んで用地提供を申出で碑
建立に協力された、というもので
す。

この戦斗には、大貫大尉の外、
日本軍人五柱、アメリカ軍人一柱
が、それぞれ祖国の礎として散華
されており、そのことは、
本シリーズその八、英風永存で御
紹介申上げてありますので御参照
下さい。

写真は、その追悼碑で「大貫大
尉戦死之地」と刻まれ、周囲はブ
ロックで簡粗に囲まれていました。
数年前は碑だけだった様に記憶し
ています。或いは心ある人の心づ
くしでしょうか。

(本稿取材に当り、近くの押尾栄
一氏の御協力をいただきました)
(給食センター小沢所長寄稿)

